

第45回民放労連 全国女性のつどい in ひろしま に参加して

KBC 制作技術部 派遣 脇山 恵
2008/6/30

去る6月21(土) 22(日)に、グランドプリンスホテル広島で開催された「女性のつどい」に、KBC映像労組から2名で参加してきましたので、報告します。

21日(土)の10:30に博多を出発して、約1時間。新幹線であつという間に広島駅に到着しました。

ホテルでは、白いシャツに黄色いバンダナの実行委員さんが大勢で出迎えてくれました。実は、広島駅でも、「女性のつどい」はコチラ という看板を持って立っている実行委員の方に出会っていたのです。

資料を手に、会場入るとホントに女性ばかり。当然ですが。

まずは、大会開催の挨拶があり、続いてFM802労組と日本テレビ労組の現状報告もありました。FM802労組では、15年にもわたって闘い続け、社員化を勝ち取ったこと、日本テレビ労組では、労働時間を会社が変わろうとしている事など。

次に、平和記念講演「はだしのゲンと私」と題して、中沢啓治さん(1939年広島県広島市舟入本町生まれ、69歳)が自身の被爆体験を赤裸々に語って下さいました。



原爆投下後、大火傷を負った人々に水を与えた途端、水を飲めた安堵感から生命の糸がブツンと切れて数秒で死んでしまったという話や、被爆した母親が亡くなり、火葬した後、身体のだの骨も拾うことができなかつた時に初めて、中沢さんは原爆に憤りを覚え、後に、原爆をテーマにした作品を描くことにしたという話など、自分の目の前で起こった事のようにリアルに感じられました。中沢さんの父親が「この戦争は間違いだ」と言い続けた為、非国民、思想犯として1年半ほど拘留され、拘留所では食事に塩分を抜かれて、開放された時には、茶碗を持つことすら出来ない酷い状態だったとか。戦争は突然起こるのではなく、だんだんと知らぬ間にそういう体制が浸透してきて、流れの中で戦争へ向かっていくのだということ、「皆で、目を見張って、戦争の流れを止めようという意識をもっていてほしい」という言葉を聞き、「平和であることがどんなに有難いことか」、「戦争の恐ろしさ」など、私は無関心になりつつあるのでは...と、思うと、ゾッとしました。

それから、6つの分科会が行われました。

- ① 聞いてみようや！ 放送の「いま」と「これから」～放送を取り巻く環境～
講師：大場洋士さん(民放労連副委員長・テレビ朝日労組)
- ② 知って・語って・考えようや！ いきいきと働き続けるためには、どうしたらいい？
講師：野崎清さん(「放送と女性ネットワーク in 関西」世話人)
- ③ 歩いてみようや！ 平和公園 ～語り部とともに～
語り部：宇根利枝さん
- ④ やってみようや！ 今すぐに！ ～CO2削減って、こんなに簡単だったの？～
講師：藤野完二さん(グリーンコンシューマーひろしま代表)
- ⑤ 検証してみようや！ なぜ起きるのか？ 偽装表示 ～消費者共犯説～
講師：矢野泉さん(広島大学大学院 生物圏科学研究所 准教授)
- ⑥ 今日からはじめようや！ 撃退法 ～ストレス病にならないために～
講師：長井敏弘さん(みなみストレス内科クリニック 院長)

私は⑥に参加しました。

分かりやすい説明とレジメで、自分を分析できたり、他の人がどんな事で悩んでいるのか、どんな解決法があるのかを知ることができ、有意義な時間を過ごせました。

溜まったストレスを吐き出すには・・・

1. 週に2～3回は運動をして汗をかく
2. 仕事とプライベートを分ける
3. 睡眠時間を十分とる
4. 夢になれる趣味を持つ！（仕事と関係のない、習い事など）

これらがポイントだそうです^^

特に、講義後、講師に質問する中で出てきた、

ストレス病から復帰した人との職場での接し方や、中学生くらいのお子さんを持つお母さんの悩みなどは、参考になりました。

そして、楽しみにしていた交流会では、分科会の報告と、クイズ大会も行われ、全国各地から寄せられた、つどいへのお土産を賞品として皆で楽しみながら、ご当地広島ならではの問題に頭をひねっておりましたが、同じテーブルの地元の方に思わず頼ってしまいました。

1テーブルに9人ほどが座り、広島を始め、佐賀、高知の方々とも名刺交換をしてみました。



22日(日) は、映画監督 佐々部清さん（1958年、山口県下関市生まれ）

の記念講演「夢になれることへの感謝 今、夢中になっていますか？」

で始まりました。

佐々部さんは、18年間助監督を務め、監督になったそうです。

TVで言うと、助監督はADさんのようなものですが、佐々部さんは「如何にして俳優さん達を気持ちよくカメラの前に立たせるか」を常に考えるそうです。

映画の世界では、演出部と制作部とに分かれていて、演出部は「キャストの母」、制作部は「スタッフの母」と呼ばれたり、演出部は「フレームの中に責任を持って」、制作部は「フレームの外に責任を持って」と、よく言われるのだとか。

それぞれの役割を分担し、一つの映画を皆で一丸となって作り上げていく姿勢、真剣さは、並大抵のものではないと想像します。

一瞬でも夢中になっていれば、それが画面を通して、見ている人に伝わるのではないかと佐々部さんは言います。

「何を撮るかではなく、何の為に撮るか」とは、映画『ホタル』に出演した高倉健氏の言葉。



佐々部さんはTVの仕事にも関わった経験からか、TVもよくご覧になっていて、いくつか苦言も呈されました。

特に、最近の番組開始時間が**ズル**い、しかも、皆が真似をしている（たとえば、19:56～など）、

CMへの入り方や明け方（長く間を取り引っ張った挙句、また同じシーンから再開）、

スタッフロールが速くて殆ど読めない など、

私達も苦笑してしまうような、チクッと刺されるような感覚でお話を聞きました。

スタッフロールについては、佐々部さんは、「本当にスタッフの事を思って流しているのかわからない」と一言。

ローカル局では、そこまで酷くはないと私は思うけれど、よろしくない所までキー局を真似しないようにしたいです。

佐々部さんは、とにかく、仕事に夢中になっているんな作品を生み出して来られました。

『陽はまた昇る』『チルソクの夏』『半落ち』『四日間の奇蹟』『カーテンコール』『夕凧の街 桜の国』（ロケ地：広島）など。

ご自身のお母さんに見せたい（見せられる）映画を作り続けているそうです。

夢中になることを許してくれる家族に感謝しながら。

最新作『三本木農業高校、馬術部』にも注目です。



今回、大きなつどいに初めて参加して、普段はお会いできない地方の方とも触れ合うことができた事は、貴重な体験でした。

また機会があれば、女性のつどいに限らず参加したいと思っています。

つどいでは、KBC労組の方々にもお世話になりました。

快く、送り出してくれたKBC映像労組に感謝。



第四十五回民放労連全国女性のつどいは、瀬戸内海の見渡せる広島市に総勢二一四名(子ども十六名を含む)を迎え、開催されました。

今回のスローガンは「We Believe in Future」じゃけえ、ウチらが動こうや!」です。これは前回のテーマ“このままでいいの?”を受けて、過去を知り、未来を見つめ、これからの行動のきっかけにしたいという思いが込められています。

一日目は、「先輩たちがバトンをつないでこられたおかげで、四十五回まで積み重ねることができた。女性のつどいを情報交換、ネットワーク作りの場として活用し、元気になって帰って欲しい」という女性協立副議長の挨拶で始まり、続いてFM802労組から、十五年にわたる粘り強い闘いの結果、社員化を勝ち取った報告などがされました。

「はだしのゲン」の作者である中沢啓治さんによる平和祈念講演では、今も鮮明に残る被爆体験を語っていただきました。「戦争はいきなり起こるわけではなく、ファシズムは知らない間に浸透して、その流れの中に吞まれて行ってしまうものである。みんなで目を見張ってほしい。」
そして、親から子へ戦争の話をしっかり伝えていくことが大切であること、私たちマスコミに対しては、「過去の日本」に戻らないように警鐘を鳴らし続けて欲しいというメッセージをいただき、使命を再認識しました。

その後、「聞いてみようや!放送の『いま』と『これから』放送を取り巻く環境」、
「知って、語って、考えようや!いきいきと働き続けるためには、どうしたらいい?」、
「歩いてみようや!平和公園へ語り部とともに」など、六つの分科会に分かれて、民放で働く女性ならではの活発な討議や交流が行われました。

二日目は、映画監督である佐々部清さんが「夢中になれることへの感謝 今、夢中になっていますか?」というタイトルで講演されました。いくつかテレビへの苦言があった一方、テレビへの期待も話され、「人に思いや物事を伝える側は、一瞬でもそれに夢中になっていないと届かない。どれだけ自分の仕事の世界に誇りを持ち、夢中になれるか」、明日からの仕事へのヒントをもらった気がしました。

さまざまな年代の女性、男性、そしてたくさん子どもたちが「平和の地 ヒロシマ」に集い、平和を考え、未来を想ったことは、たいへん意義深いものでした。

今、マスコミで働く私たちは何をすべきなのでしょう。今大会で一人一人が折った折り鶴が千羽鶴となるように、一人一人が考え、一歩踏み出すことが “希望の持てる明日”を創っていくと確認して、「女性のつどい」のアピールといたします。